

西部地区事務局より

○第5回運営委員会参加者とその旅費

	氏名	学校	費用
西部地区事務局 旧	森下恵理子	袋井市高南小	欠席
西部地区事務局 新	松井靖明	浜松市佐藤小	6 9 6 0 円
研究部 旧	杉本真理子	浜松市双葉小	4 8 4 0 円
研究部 旧・新	井口亜由美	浜松市神久呂中	4 8 4 0 円
研究部 旧・新	南谷由香	浜松市可美小	5 1 4 0 円
研究部 旧・新	名倉文康	袋井市袋井東小	2 3 6 0 円
研究部 新	増井幸代	磐田市立磐田中 部小	2 7 2 0 円

○ 運営委員会に入る先生方の氏名と所属

	氏名	学校
西部地区事務局	松井靖明	浜松市佐藤小
研究部 部長	井口亜由美	浜松市神久呂中
研究部	南谷由香	浜松市可美小
研究部	名倉文康	袋井市袋井東小
研究部	増井幸代	磐田市立磐田中部小
心理検査	浮田郁子	浜松市双葉小
調査対策	永井智加子	袋井市浅羽東小
調査対策	大塚麗子	袋井市高南小
調査対策	小出千恵	浜松市可美小
教材費	安部美弥子	磐田市豊田南小

○ 新設・増設・移転情報

・新設 発達通級  
磐田市立豊田中学校 すまいる豊田中

・増設1 発達通級  
浜松市立天竜中学校

○今年度の事業報告、来年度の事業計画

今年度の事業報告

地区	開催日	内容
西部	7月4日	担当者講習会（構音を学ぶ会）
	9月5日	担当者講習会（構音を学ぶ会）
	12月12日	担当者講習会 （吃音のある子供に対する指導の実例）

来年度の事業計画

地区	開催予定日	内容
西部	4月23日	新任者研修会・担当者講習会
	5月29日	担当者講習会（構音を学ぶ会）
	7月3日	担当者講習会（構音を学ぶ会）
	9月4日	担当者講習会（構音を学ぶ会）
	6月19日	担当者講習会（ICTを利用したLD指導について）
	7月10日	検査技能講習会（WISC-IV 指導への生かし方）
	9月18日	担当者講習会（吃音の理解・具体的な指導方法）
	10・11月	担当者講習会（未定）
	12月4日	担当者講習会（小・中学生の感情理解、感情表現）

○第3回紙上発表の意見と感想

(別紙1)

○「今後の静言研のあり方」について評議員からの意見

(別紙2)

### 第3回定例研の分科会発表の感想 全体 (別紙1)

#### ☆ 番町小 新井先生 ☆

- ・吃音児のグループ指導の有効性を感じた。仲間作りは必要。(一人ではないという思い)
- ・個別とグループをバランスよく取り入れたいと思った。
- ・個別でその子のペースで丁寧に行う場所と自分以外の同じような特徴のある仲間とかかわれる場所のそれぞれの必要性を感じた。
- ・自分を知り、他者(仲間でもある)を知ることが大切。
- ・吃音グループの有効性が伝わってきた。本校でも吃音グループ活動を行っているが、年齢のばらつきがあり、このような話し合いはなかなかできない。それでも継続していくことが大切だと考えている。吃音と一言でまとめられないほど実態は様々だと感じている。今回のような方法もあることが分かり、また、一つ吃音への方策が増えたと感じた。
  
- ・吃音の指導はやればやるほど、奥深く感じます。「吃音のある同年代の仲間とともに、対話を通じた活動をしていくことで自分の吃音と向き合い、自分なりの吃音との付き合い方を学ぶことができるのではないかと考えた。」という言葉が印象的でした。
- ・私たちの教室でも対話を大事にしていきたいと思っています。新井先生の実践は、道しるべになるものでした。担当者自身の対話する力をつけていきたいと思いました。ぜひ、対面で聞いてみたい内容でした。何かの機会に聞かせてもらえたら嬉しいです。
  
- ・発達障害のある児童にとっても自己理解は必要なので、大変参考になった。
- ・根拠のある発表で分かりやすかった。
- ・「自己理解」のグループ学習の計画が、「自分を知る」「自分を語る」「自分を発信する」という構想で、1年間の流れが分かった。
- ・事例の手紙文を使って考えたり、ジョハリの窓を参考にして取り組まれたりしていて、指導の参考になることが多かった。
  
- ・吃音があっても躊躇せず話すことができるよう、子供との関係を構築し心が落ち着き安心して過ごせる環境づくりを心掛けていきたい。
  
- ・同じ吃音を持つ子ども同士のグループ活動は、他の子どもたちと関わることで、自分を知ることができ、またお互いに語り合うことによって、吃音の理解をより深め、吃音に向かう気持ちを良い方向に育てていくということが分かりました。
- ・指導者にとって、グループ活動の中で、一人ひとりの吃音に対する受け止め方が違う

と実感できたことは、個々に合った支援を考える上で大切だと思いました。

- ・吃音のグループ活動は、大変有効であると思います。周りに吃音で悩んでいる子供が少ないとこれからどうしたらよいのか一人で悩み、ことばの教室に通級する子も多いのではないかと思います。そんな中で、丁寧に年間計画を立てて、一人一人の見取りをしながら、全体としてより良い方向に導いている素晴らしい実践だと思いました。ありがとうございました。
- ・吃音の指導については、吃音そのものの軽減とともに、話すことに対する自信や自己肯定感の回復が大切だと考える。その中で、こちらの実践は、子どもたちがことばにつまりながらも、自分たちが作った「吃音クイズ」を先生達に出すなど、楽しみながら先生に自分の吃音について伝え、吃音を話しても大丈夫だと思える機会を作っていて、素晴らしいと思った。
- ・同学年の子供5人でのグループ活動ができるっていうだけでも有意義だと思った。同じ仲間がいることの安心感・存在意識・仲間意識がこれからの生活にとっても大きな影響を与えてくれることともいえました。𠄎
- ・ウエンデル・ジョンソン…懐かしい！自分の振り返りで5段階評価ってというのが子供にとってはわかりやすいと思いました。𠄎
- ・公開授業…担任の先生方に向けての発表…いいですね。児童理解にもつながるし、担任との相互理解にもつながる活動だと思いました。組織化・企画、実践につなげられたのが良かったです。𠄎
- ・振り返りカードでの自己評価のグラフによって、吃音症状も軽くなっているし、気にならなくなっていることが良く分かった。流暢性を高める活動と共に心理面でのアプローチが有効であったと思う。今後もグループ活動を通じた実践を継続し、経過を見守ってほしいと思った。𠄎
- ・発達教室では、自分の目指す姿を自分で話せるようにしています。吃音でもジョハリの窓を使って自分の状態や受け止め方を身につけさせることが分かりました。通級は、目指す姿や目標が一人一人違うので、様々な方法で自覚できるようにしていくことは大切だと思いました。
- ・吃音のグループ指導は吃音理解や安心感を得たりするのに、大変有効と思います。吃音のことで困ったことがあったら、オープンに相談できるようになったら丁寧にみんなで話し合う場であることが大切だと思います。そして、ことばの教室以外の場へ広げていく、つなげていくことが私たちにできることではないかと感じています。

- ・「ぼくの吃音クイズ」は、自分のことを伝えるよい手段だと思った。
- ・ことばの教室での改善の様子がよく分かった。これが、普段の学校生活の中で、どのような表れになっているか知りたいと思った。
- ・吃音をもつ子供が自信をもって生活できるようなグループ活動ができていて素晴らしいと思いました。思いを書かせることも大切なのだと思いました。
- ・吃音児にはグループ指導が効果的だと、改めて目を開かされた思いです。日頃から、子供が自分の吃音に対して語る言葉と内面の違いを何とかしたいと感じていましたので、本実践の自己評価は有効なのだと分かりました。参考にさせていただきます。また、経験年数による吃音の受け止め方の違いに、通級の成果が表れていると感じました。  
今後も、心理的アプローチと発話の流暢性スキルと両立しながら「安心して過ごせることばの教室」を目指して努力しようと思いました。ありがとうございました。
- ・グループ活動を意図を持って計画的に行った素晴らしい実践だと感じました。（自分は自分のままでいい）（仲間がいる）（見守ってくれる家族や先生がいる）（自分の思いを最後まで伝えたい）という思いが持てた。あるいは、将来持てるだろうと感じました。
- ・本校も来年こそはグループ指導を行いたいと考えております。参考にさせていただき、計画的に実践したいと思います。
- ・吃音のある子供たちにとって、グループ活動が有効であることが改めて分かりました。吃音のある同年齢の子供たち同士が対話を通じた活動をしていくことで、吃音との付き合い方を学ぶという、ピア・サポートトレーニングの理念に似た活動であったと思います。安心して、自分の気持ちを言葉で表現する場が設定されていることで、子供たちが自分を見つめる有意義な時間になったと感じました。また、A児やB児のように「ことばの教室」の通級期間が長い場合、吃音に対する考え方が変化することも興味深かったです。
- ・3年生のグループでも、これだけ自身の吃音のことを掘り下げて考え、語り合うことができるのだなと感心しました。口には出さないでいても、実は不安や心配があり、それでいて日常の生活の中で話題にできないでいる子供たちにとって、同じ不安・心配を抱える仲間同士だからこそ、安心して話せる、分かり合えることが大きかったのだと思います。
- ・担任の先生への「ぼくの吃音クイズ」「どんなアドバイスができるか」「言語関係図を参考にしての実態把握、自己評価」など、大変参考になりました。

- ・表面に表れにくい内面の思いを、グループ活動の中で出していくことで、吃音の悩みが軽くなり自信をもって表現できるようになっていきました。同じような悩みを持つ子どもたちをグループで指導することで変化し、素晴らしいと思います。
- ・グループ指導の実践やワークシートがとても参考になりました。
- ・グループ指導を段階的に行うことで心の成長を児童も指導者もつかむことができ、効果的だと思いました。
- ・吃音への不安や恐怖を常に感じながら学校生活を送ることは本当につらいと思います。それだけに励ましあえる仲間がいることはとても心強いことでしょう。グループ指導を行うことにより、悩みを共有したり、対処方法について考えたりすることを通して安心感を得ることができたと思います。
- ・初めは全員が自分の吃音について「気にしていない」と話していたものを、グループ指導を重ね、事例について検討し周囲の友達の意見や気持ちを聞く中で、吃音を言空いていることの苦しさや、本当の自分の気持ちに気づき開示できました。同じような経験や思いをしている仲間がいて、また、自分の吃音をどう受容したらいいかをみつめ、対処方法も分かるようになることで、安心して生活が送れるようになったと感じます。
- ・図5・6から、吃音の症状の頻度の高さと、悩みの大きさが比例していないことが分かります。吃音症状が周りから見てどんなに酷くても、当人の心の苦しみの軽重によって吃音がでていないという認識にもなるのだと驚きました。寺井先生の行った吃音のグループ指導は、吃音と共に生きる子どもに、重要な力が付く、効果的な実践であったと思います。
- ・心理的なアプローチの大切さは、どの指導にも共通して言えることだと思います。自分に合ったスキルを身に付け思いを伝えていける子が増えることを願っています

### ☆佐藤小 松井先生☆

- ・アセスメントの重要性がよく分かった。が、今の自分にこれほどのアセスメントができるかと考えると難しい。少しでも近づけるよう研修したいと思った。



- ・丁寧なアセスメントとそれを効果的な指導へとつなげることの難しさに直面していて（検査等の技術も不十分なため）ますます松井先生のすごさを感じた。
- ・長年にわたって学び続けている松井さんならではの突き詰め方すごいと感じた。内容から得るものが多く、エキスをたくさんいただくと同時に、同じ言語担当なのに、自分は今のままでいいのか！？と自問自答するばかり。WISC-IV一つとっても、なかなか消化しきれずにいるが、私も子供の実態をある程度見てから実施したいと考えている。実態をつかんでどう支援していくかについて、通り一遍のことしか言えない状態である。保護者や担任と話合うにあたり、腹案を持てるよう学びたいと感じた。松井さん。講師をやってくれませんか？
- ・言語発達遅滞の子たちには、どこから手を入れていくといいか迷うことが多くあります。その中で、アセスメントから子どもの困り感をとてもよく分析していると思いました。詳しい資料ありがとうございました。
- ・ことばの教室での指導とともにその子が長く暮らしている学校の環境調整は、とても大切なものだと思います。
- ・ことばの教室における多面的なアセスメントの方法が理解出来た。
- ・適切なアセスメントは、子どもの指導に生かされるだけでなく、支援者(保護者、教師)の児童理解にもなり、その子に合った指導や支援につながると感じた。
- ・適切なアセスメントは、本人の自己理解にもつながっていくと思った。
- ・アセスメントを多面的に行うことで特性が明らかになってくる様子がよく分かった。WISC-IVからその子のやりにくさの原因が明らかになり、指導の方針が考えられていたので、ことばの教室においても WISC-IVの分析が有効であると思った。また、WISC-IVにとらわれすぎないで、その子との空気感を大切に、会話を楽しんでいくことも大切にしていきたいと思った。
- ・二者の児童の比較が、大変分かりやすく感じました。アセスメントは、同じ困り感を持っていても、子どもによって要因や原因が違うため、個々に応じた支援を行うにあたっては効果的であると感じました。また、アセスメントをする前に、まず、普段の子どもの様子をよく見て、実態を把握し、その上で必要なものをチョイスし、実践していくことが大切ということに共感しました。
- ・アセスメントを大切にされた支援計画は、通級指導にとって一番大切なものであると思います。一見同じような困り感でも、詳しく観察していくと原因・要因は様々で違い、どこから指導や支援を切り込んでいくかによっても大きく違いがあります。たかが週一回の指導、されど週一回の指導を通級児にとって有効な指導をしていきたいと思えます。今後の参考にさせていただきます。

- ・アセスメントがとても大事だということが伝わるレポートだと思う。多角的に実態を把握することで、指導の方向が明確になるのはその通り。2者を比較しながら各自に合った指導・支援を考察していることがすばらしい。「学者や研究者」と「実践家や指導者」との違いは、実際の指導・支援にどう生かすかという点だ。学習意欲、興味・関心、達成感、実態に合わせた教材・教具の提示、指導技術等、私たちは常に学んでいくことが大切だと感じた。幅
- ・表れが似ていても、なぜそうなるのかの要因は違う場合もあるということにはっとさせられた。要因が違えばアプローチの仕方も変わってくる。引き続き指導過程も教えていただきたい。杉
- ・発達でもアセスメントが大切という話題は、よく出ます。本人の強みで弱みを補えるようにトレーニングを積み、本人も自分の課題を意識することを大切にしています。ただ、WISCなどの資料を参考にしてしまうことが多いです。松井先生の実践は、細やかなアセスメントにより、より実態をとらえ、プログラムをフィットしたものにしていることが伝わりました。
- ・丁寧なアセスメントを行い、児童理解や指導目標の設定につなげていくことがわかりました。必要な検査をチョイスするためには、検査についての研修を深めなくてははいけませんね。
- ・二人の様子が左右で掲載されていて、共通点と違う部分が比較できて分かりやすい。
- ・アセスメントの大切さを改めて感じた。自分の今の支援がよいのか、来年度に向けて再度、見直しが必要だと思った。
- ・いろいろな検査で子供をしっかりアセスメントし、支援の方法を考えていくことができていると思います。自分も検査を少しずつ挑戦してみています。そのような研修の場もあるとありがたいです。
- ・発達や発音に課題を抱える児童への指導に当たって、常に感じていることが、この指導法で本当にいいのだろうかという不安です。指導の計画を立てるにあたり一番大切なことはアセスメントであることは分かっているのですが、正確な実態把握は、とても難しいです。佐藤先生の実践を拝見し、自分の指導計画の甘さを反省しました。理論に基づいて実施する検査をもとに、同じような表れの2名を比較してそれぞれ全く違う課題を明らかにし、指導計画を立てる過程は、とても分かりやすく、自分の担当する児童はどうだろうと、考え直す視点を与えてくださいました。一方、現場で使われる WISC 等の検査が万能ではないということ、行動観察こそがアセスメントの基

本だという言葉に勇気をいただきました。ありがとうございました。

- ・同じような困り感を持っていても、二人の特性が全く違うことがあるので、アセスをとることは大切であり、週1回の通級だからこそ、特性をきちんと把握して、特性に合った支援を計画し、実践していくことが大事だと分かりました。そして、アセスは、検査でとることより、行動観察が基本であると松井先生が実感されていることが印象的でした。
- ・保護者、在籍校・園からの情報、通級で行ったアセスメントの結果を伝える情報交換の手段として、直接会って意見交換ができ、支援の方向性が共有できる在籍校（園）訪問は大切だと感じました。
- ・在籍校（園）、家庭、通級とそれぞれの支援の役割がある。連携するためには、通級しかできない専門性を高めること、そしてそれぞれが機能するための体制作りの必要性を感じました。
- ・児童のアセスメントを大切にしたい支援計画を作成し、様々な角度(検査・面談・在籍学級担任との共有)から、今後の指導・支援の手立てを考察されているところが素晴らしいと感じました。アセスメントは、通級指導教室には必要不可欠だと改めて思いました。
- ・松井先生の「行動観察こそがアセスメントの基本」という言葉から、一回一回の指導の中で子供の表れを的確につかむことが大切であると思いました。
- ・アセスメントを生かして支援の計画を作り、指導をしていくことの大切さが、胸にストンと落ちるような分かりやすい発表だと思いました。どうやって児童の実態を見取っていくとよいのか、チェックリストや知能検査の結果をどう読み取り、指導につなげていくとよいのかなど大変参考になりました。
- ・アセスメントをしっかりと、その子にあった内容で指導していくことの大切さを感じました。アセスメント力をつけたいと思いました。
- ・言語発達遅滞の子供の指導方針、指導内容には、悩むことが多いです。アセスメントを生かした指導方針・計画の立て方を具体的に教えていただき勉強になりました。
- ・アセスメントをしっかり行うことで子供の特性・実態を正しくつかみ、指導をしていくことがよく分かりました。
- ・同じような困り感を持つお子さんでも、細かく見ると状態像が全く違うことが分かりました。学校での様子、WISC-IV、LDI-Rなどの検査結果を詳細に照合することにより、効果的な支援につなげることができたと思います。自分の指導において

も丁寧なアセスメントを心がけていきたいと思います。

- ・相談の主訴が全く同じようであっても、実態がぜんぜん違うケースはよくあります。その子に必要な付けるべき力は何だろうか？と悩むこともしばしばあります。松井先生が実践されるように、WISC-IV や LDI-R などを用いて個人個人の正確な実態の把握ができれば、その子に合った指導計画の作成と指導実践ができ、理想的だと感じますが、幼児は月齢も低くそこまでの細かな実態把握は難しいです。でも、効果的な指導には、やはり正確な実態把握は不可欠だと感じました。
- ・アセスメントをどう生かすのか、考えていくうえで分かりやすい提案でした。子供の実態と検査結果が一致しないことも多いですが、数字が独り歩きすることが怖いと思います。

### ☆富士第一小 佐野先生☆

- ・発音指導に集中して取り組ませる工夫が必要。
- ・幼児にはなおのこと口腔機能訓練や個々に応じた工夫が必要だと感じた。
- ・子供自身の達成感はこの子のどこにあるのか見極めながら指導していくことが大切だと思った。
- ・発音改善のために真摯に子供に向き合われている姿勢、何年指導に携わっていても忘れてはいけないことだなあと初心に戻る思いだった。同時に、構音指導を紙面だけで伝えることの難しさを感じた。
- ・発音指導では音を作るまでがとても大変です。「このあたりが楽しくできる工夫を考えたい。」と書いてありましたが、この気持ちに共感します。いろいろな方法を聞いてみたいです。
- ・佐野先生が最後に書いてくださったように「通級に来た親子が笑顔で帰っていけるように」私たちも指導をしていきたいと思いました。
- ・子供が達成感を味わえるように、シールを貼ったり注目する音に印をつけて視覚で分かるようにしたりすることは大切だと感じた。また、他機関と連携していくことは、指導効果が上がると感じた。
- ・子供自身が達成感を味わうことができる指導内容を、毎時間工夫していくことの大切さを感じた。

- ・サ・ザ行音の構音指導の流れが、大変分かりやすく、自分の指導を見直す機会になりました。子どもの発音練習への動機が、最初はトークンで動いていたとしても、それを通して「できた・やれた」という達成感へつなげることができると思いました。子ども自身が達成感を得るような成功体験を積み重ねることによって、自己肯定感が身についていくとよいと思いました。
- ・LD通級の自分には構音指導についてはわからないことが多いが、意欲付けの方法に興味を持った。事例生徒は、最初の頃はシールというトークンが行動の強化因子となって練習に励んでいたが、この頃には上手に発音できたという達成感が行動の強化因子になり、より積極的に練習へと取り組むようになっていったとのことである。子どもたちはトークンよりも、褒められた、認められた、上手くできた、という事実の方が嬉しく感じるものだという考えに共感した。自分も、子ども自身が達成感を感じられるような授業計画を工夫していきたい。
- ・サ行音の構音指導はことばの教室の担当者にとっては必須の指導です。私はむしろ、担当者がみんな名人芸を身に着けると良いと思う。面白く、楽しみながら、如何に効果的に発音指導をしていくか…担当者の技量や経験を高めていくことが大切だと考える。囃
- ・言語聴覚士が巡回で来てくれるなんて、すごく恵まれていると思う。専門的な指導やアプローチの仕方はとても参考になることと思う。教育的な側面も持つアプローチを加えながら、親子が笑顔で通級できるようにしていきたいと思った。囃
- ・構音指導について、あまりしっかり理解しているわけでない私でもどの様な順で支援していくのか、手順が分かりました。スからスア、スエ、スオなど派生させて音を増やしていくことが分かりました。多くの子、保護者ができるようになって保護者が喜ぶ姿が想像できました。
- ・摩擦息や音の誘導から定着まで、基本的なプログラムに沿って行われていました。スタンダードなプロセスの中、子どものモチベーションを高めるための工夫やフェイドアウトのタイミングなど、個に応じた対応がされていることが分かりました。
- ・「達成感の貯金」という言葉が印象的でいいと思った。
- ・言語療法士や作業療法士など、専門的で多方面からの情報共有ができることは羨ましく思う。
- ・サ・ザ行音の改善練習の様子がよくわかり、参考になりました。  
出る音から上手な誘導していくと改善が早まるということで、また指導の中で取り入

れていきたいと思えます。

- ・構音指導の基本をもとに系統的に指導を積み重ねられる実践のみならず、言語療法士や作業療法士、担任との幅広い連携には、「その手があったか！」と大きなヒントを与えていただきました。御褒美シールに対する考え方、教科書音読への取り組みなども大変参考になり、すぐにでも指導に取り入れていきたいと感じました。ありがとうございました。
- ・基本的な構音の練習、指導を丁寧に積み上げた実践だと感じました。印象に残っていたことは、シールによるトークンで動いていた児童が、達成感を感じると自然と積極的に練習するようになり、トークンがいらなくなるということです。指導者の児童への働きかけの良さが伺え、大変参考になりました。
- ・富士市の支援体制（定期的に ST が指導の助言をしてくれる）がよいと感じました。指導の方向性を ST が示してくれることで安心して指導に取り組めると思えます。浜松市も是非、このような体制をとって欲しいと感じます。
- ・市教委の言語聴覚士や作業療法士に助言していただいたり、一緒に指導に携わってもらえたりする環境が整えられていて、うらやましい限りです。学級担任とも連携していくことで、多方面から情報を共有していくことは、とても効果的だと思いました。先生の「通級指導教室での指導は、しっかりと知識を得ることが大事」という言葉を胸に、日々学ぶことを忘れずに取り組んでいきたいと思いました。
- ・言語通級でのきめ細やかな指導の様子がよくみえる発表で、大変参考になりました。トークンをうまく活用し、最終的に内発的動機付けにつなげることができたこと、素晴らしいと思いました。摩擦音の「ス音」をまずは獲得させ、それを手掛かりに漸次接近法で新しい音に導いていくという指導の流れも成程と思いました。これは、発達通級でも生かしていける方法、考え方だと思いました。
- ・漸次接近法（できていることを手がかりに新しい音を獲得する）…なるほどと思いました。指導しているのは発音ではありませんが、できていることから広げていくという考え方は生かしていきたいと思えます。
- ・シールのご褒美より、褒められた、できた喜びの方がうれしいに同感です。
- ・系統的・段階的指導法がとても詳しく、分かりやすく参考になりました。
- ・市の言語聴覚士、作業療法士の方と連携ができることがうらやましいです
- ・最初は外発的動機付けだったのが、改善するにつれて内発的動機付けに変化していく様子が印象的でした。正しくアセスメントし、見通しをもって指導をされたからこそ

の達成感だったと思います。

- ・構音指導の様子を教えてください、大変参考になりました。特に、言語聴覚士、作業療法士、学級担任との連携が有効な指導に繋がっていることは、素晴らしいと感じました。また、あるべき姿だと思います。指導に当たっている先生方が個人で悩んで抱えがちになり、独りよがりな指導になる危険性を回避できると考えます。先生の締めくくりの文にありました「一人でも多くの知識を集結することが大事である。」は、指導者全般に伝えたい言葉です。
- ・構音指導の一端を知ることができました。いつも笑顔で帰えられるようにしていきたいと思いました。

### ☆西益津小 永谷先生 ☆

- ・集団だからこそできる指導のよさを感じた。
- ・スピーチの指導では、3年間にもわたりスモールステップでのご指導に頭が下がった。また、グループで行うことで、良い刺激を受けながら成長していく様子がよく分かった。
- ・グループ活動の有効性が伝わってきた。私の勤める言語教室は個別指導が中心だが、在籍校とのつながりを考えて、小集団（2～5人程度）でのグループ活動を学期1回程度行っている。場面が変わると子供たちの表れも変わるので、成果や新たな課題などが見えてくるのが少なくない。学習形態も支援方法として大切だと改めて思った。ただ、今年度はコロナ禍のため複数校の児童が交じり合うグループ活動には慎重にならざるおえなかった。
- ・グループ指導の中でのA児の成長がよく分かりました。年数をかけ、一年ごと目標に向かって活動し、力をつけてきたのだと思います。
- ・吃音の子たちのグループ活動をしています。グループ活動には、個別指導とはまた違ったよさがありますね。
- ・グループ活動における、「スピーチ」「ワンバウンドゴール」等、複数の児童が同じ活動をするが、それぞれのめあてを明確にすることで、表れを見取り、手立てを工夫することが大切であると感じた。
- ・グループ指導の実際を詳しく教えていただき、とても参考になった。グループ指導の良さを感じた。

・一人の児童を三年間にわたっての指導を通して、一年ずつのめあてが明確であり、それに向かって段階的によりよい支援をされ、子どもが成長していく様子が素晴らしいと思いました。ワンバウンドボールでは、個人の成長だけでなく、チーム戦を設定することで、チームの関わりから仲間意識を感じ、社会性の育ちにもつながっていると思いました。登校・通級渋りがあったそうですが、在籍校や保護者の協力がある連携のとれた環境であったことが本児の支えになったと思います。

・本校では現在グループ指導を行っていないが、グループ指導やペア活動だからできること、学べることが多いことを再認識した。来年度から本校の通級指導教室も2教室に増設されるので、この機会にグループやペアの活動を積極的に組み込んでいきたい。

・発達通級でのグループ活動、少人数でコミュニケーション能力を高めるための活動が紹介されていた。他の児童とのかかわりが良い刺激となって頑張れたのだと感じる。ワンバウンドボール等の実践事例。子供の変容を表現するのは難しかったと思うが、記録を取ることで次への意欲が高まったり達成感を味わったり…有意義な活動だったのだなと感じた。幅 次ページへ続く

・発達通級での指導・支援で、困ったときにはヘルプを表すことが重要視されているように感じた。簡単そうでなかなか実践できないことで、集団の中で活かせるようにしていくまでに時間と具体策、見届けが必要な場面が多くなっていくことと思う。幅

・思いが伝わるように話す…ポイントとなるのが、5W1Hの基本文形や「はじめ—なか—終わり」の構成で、これを1年生のうちにとしっかりと身に付けておくとその後あらゆる場面で活用できていく。そうしたことがなかなかできなかった児童には、このような指導によって身に付けていくことが大切だと感じた。メモ書きとして時間設定をして話す内容を考えさせているところが基本をとらえた指導になっていると思う。幅

・袋井では、ペアや複数グループを組むことは慎重で、指導の多くは個人指導になっています。一人ずつの指導で実態が分かってから夏の面談などで、相談の上、組むようにしています。複数人で組み試されているので、自分が経験していない設定のとき、表れがどうなり、どんな効果があるのか参考になりました。

・目当てに向けて粘り強く時間をかけて取り組んだことが伝わりました。作文を書く活動の中にも、ヘルプの出し方のトレーニングがあったり、ワンバウンドの中に多くの狙いが設定されていたりしました。目標を達成するために効率よく活動を厳選したこ



とを感じました。

- ・ペアやグループの活動のよさは、「仲間に認められる」「仲間に頼りにされる」ことが自信につながると思う。現在は個別指導しかしていないが、来年度はペア活動の予定があるので参考にしたい。
- ・運動課題のよさが分かった。ぜひ、取り入れたいと思う。
- ・グループ活動でのスピーチ原稿づくり、発表、質問で、コミュニケーションをする力がつき、ワンバウンドボールの活動を平行して行うことで、発達全体に関わる力も伸ばすことができたと思う。通常の学級での適応にも波及でき、効果的な支援だったと思う。
- ・「在籍学級で、少しでも過ごしやすくなるような力を育てたい…」永谷先生の願いに共感しました。また、在籍学級担任と保護者と通級児と共に成長を願う様子が、通級の理想的なあり方を示しているのだと思いました。自分の教室にも事例A児に似た子供が数人います。3年間、同じ課題を繰り返しつつ子供の成長をみとる本実践を、今後参考にしていきます。個別指導、ペア・グループ指導など、多彩な経験を積んでいらっしやっただけの永谷先生の指導力が感じられる発表でした。ありがとうございました。
- ・スピーチを通じた実践が参考になりました。(モデルが周りにいる)(みんなもがんばっているから)というグループ環境が、頑張りを支えている・・本当にその通りだと感じました。
- ・ペアやグループだからこそできることがあるという考え方には賛同です。子供同士の関りを意図的に設定していく中で、個々の目標を明確にして個々の活動の場を考えている指導は、今後の指導の参考にしていきたいと思います。先生の目標設定、温かく見守る姿勢が子供たちの素晴らしい成長を生み出したと思います。
- ・「自分の思いを伝えることができるようになってほしい」という主訴を受けて、ヘルプの出し方を知る—ヘルプが出せる—自分からヘルプが出せる など、具体的に段階を踏んだ具体目標になっているところが大変よいと思いました。スピーチ課題も、学年が上がるに従い、段階的に指導を重ねることでA児の力を確実に伸ばしていると思いました。
- ・藤枝市では、個別中心、ペア・グループ中心の発達通級があると初めて知りました。その子の実態に合わせて対応できる体制になっているのがいいです。グループならではの実践を知ることができよかったです。

- ・通級で学んだことを般化していくことの難しさは感じています。しかし、通級でできたのだからきっとそれを生かせる、発揮できる 때가必ず来るとも思います。
- ・同じ課題をやり続けるからこそ学べる ことがあると改めて思いました。あれもこれもと手を出してしまいがちな指導を反省しました。
- ・子供 の特性を把握した指導の大切さを感じました。
  
- ・指導開始時はおぼつかない書きぶりだったものが、3年間の継続したご指導により、指導終了時には自分の思いを自信をもって文章にすることができており、3年間の大きな成長を感じました。運動課題や、グループ指導の効果が十分に生かされたものと思います。通級以外の場での汎化は難しいものと思いますが、通級指導で身に付けたものはどこかで行かされていくものと思います。
  
- ・自分の思いをメモし、発表することは、相手を意識し、理解し合う為にも不可欠な指導であると同時に、自己を理解する上でも有意義な内容であると感じました。特に、運動課題の指導する際、「心の火山」の課題を用い、自己の気持ちの種類とレベルを知ることが、自己をコントロールできることに繋がっていると思いました。これらの指導は、児童が先生の指導の手から離れても、これから様々な場面で非常に役立ち、児童を支える内容であると思います。
  
- ・A児の成長の記録がちゃんととらえられていて学びになりました。作文指導も繰り返しが力になりますね。

## ☆ 全体を通して ☆

- ・どの発表も素晴らしく勉強になった。ただ、とても大変な作業だなと感じた。紙上だけでは伝わりにくいものもあるので、発表を延期か中止する方がいてもいいのかなと思う。
- ・紙上発表だったのですべての分科会の発表内容を知ることができた。コロナ後もいろいろな分科会の発表内容を知りたいと思った。

### 1 定例研・地区講習会（回数、運営形式など）について

#### <定例研・地区講習会について>

○コロナ禍が終息するまでは、三蜜に気を付けながらの開催となる。移動にも留意しなくてはならない。県内のコロナの広がり経過を見ながら、どんな形でなら開催できるのか検討していく必要がある。

○web による研修であれば実施は可能なので、令和 3 年度の定例研は原則 web による会議方式で行っていくのが良い。各所属所で、Web 会議が可能かどうか、調査・検討し、できない所属所は、近隣の可能な所属所と一緒に web 会議に参加するように調整していただくようにしたい。

○実践的な研修は、対面でないとできないことが多いので、地区講習会については、蜜を避け、マスク着用、車での移動、換気等に十分に留意しながら実施していく方向にしたい。

○研修内容によって web でも可能であるとのことであれば、状況によって web での地区講習会とすればよい。

○回数は、精選していく方向で。だが、必要なこと・やれることは進んでやっていく方向で検討してほしい。

○回数については以前から 2 回にしても良いのではないかという意見があり、今回の会員のアンケートを見てもそのような意見も多いと感じる。地区講習会が充実してきているので、定例研が 2 回になっても良いのではないかと感じる。

○2 回になることで、定例研が果たす役割や期待される成果を会員の皆さんが感じてほしい。分科会は 1 回のみとして、1 年間の実践・研究について発表してもらうのがよい。

○3 回定例研が行われ、各地区で校長会が開催される意義は非常に大きいので、校長会の持ち方がクリアできなければいけないと思う。たとえば、中部地区で開催する時に全県の校長会は無理だろうか？（2 の運営にも関わるが…）

○定例研については、年 2 回の開催でよいかと思います。

（中部と西部、中部と東部の組み合わせを隔年で）

西部と東部については、旅費の問題が大きく、互いになかなか参加が難しいと思います。

○定例研については、是非一堂に会する機会を維持できるとよいと考えます。

（テレワークも取り入れていくとよいのですが、それのみになってしまうと静言研への所属意識や一体感は薄れていってしまうと思います）

○地区講習会については、今までと同様の開催、様々なテレワークを活用しての開催といういろいろな開催の方法があつてよいのではないのでしょうか。

（私などは、テレワークでの参加、運営となると、つい二の足を踏んでしまうのですが、当

然テレワーク環境を整えることが難しいケースもあると思います。テレワークであるのかどうかも含めて選択していけるといいなと思います)

○定例研や地区講習会で著名な先生の話を知ることができたのは、とても大きな成果だと思います。幅広い知識を知り、日々の子供たちの様子を見ながら指導したり、保護者に思いを伝えていくことができたりしました。

○定例研の回数を減らした場合、市の研修が十分でないことが多い現実の中、地区講習会を充実していかないと、担当者の研修ができなくなります。ことばの教室の担当者が構音指導も吃音指導もできないということにならないようにしたいものです。目立たないけれど、困っている子たちに焦点を当てていってあげてほしいです。そのためには、担当者の研修は必要です。

○地区講習会を充実させていくためには、ある程度講師について考えていく必要があります。地区の担当校も事務局も、そのつもりで運営をしていかないと偏った研修会になってしまい、必要な研修ができない可能性もあります。

たとえば、

- ◇ 吃音・言語・構音・発達の講習会を必ず入れていくようする。
- ◇ 毎回講師を変えなくてもスーパーバイザーのように相談にいつものってもらえるような先生にきてもらう。
- ◇ 構音指導の場合、STの先生だけでなく、教育という分野が入ってくるので、ことばの教室を担当していた先生の話が視点として有効だと思う。西田立郎先生は、いつでも来てもいいと言ってくれたので、毎年どこかの地区で呼んでもらい静岡県の構音のスーパーバイザーになってもらうとか。
- ◇ はじめの一步の講師をしていたシニア？の集まりがあり、その先生たちが全国に出張に来てくれると聞いた。
- ◇ はじめの一步や日言研の先生たちを講師として呼ぶことができれば、静岡にいなながら、東京と同じ研修ができる。
- ◇ よい先生の話は、単発でなく、シリーズでやってもいい。
- ◇ 他地域で聞いて良かった研修会の講師の先生がいたら、静岡に来てもらってみんなに聞いてもらう。
- ◇ いろいろな地域の研修会に参加できるようにする。

○定例研への出張が難しくなっている中、オンラインで研修を進めていくのは、受け手側としては、よい方法だと思います。しかし、定例研を担当する学校は、自分たちだけでは、技術的に難しいと言っています。

## 2 組織運営に関することについて

(組織、運営、運営委員会、校長会、地区分け、補助金、要望書など)

- 校長会において、言語指導の重要性を説くことは、とても大事。所属長が「ことばの教室」や言語指導についての理解を深めていくことは、指導を受ける児童・幼児・保護者にとっても担当者にとっても必要なこと。
- 県の親の会との連携をより図っていく必要がある。行政に働きかけるには、親の会と連携し、両輪となっていくことが大切だと考える。互いに連絡不足がないように努めていってほしい。
  
- 中部地区で県事務局を担っていただけて、大変ありがたい。
- 現在、研究部は西部地区担当者だけで行っているが、各地区の定例研運営の担当校が相談したり連絡したりするには、各地区研究部がいる方が良いのかもしれないと思う。研究部長は西部地区が務め、部員は各地区から選出する(調査対策部のように)ように変更することを検討しても良いのではないだろうか。
- 要望書は、今後も行政に働きかけていく必要があると考える。
  
- 運営委員会については、テレワークを生かしていくのがよいと思います。ただ、やはり年に1～2回程度は一堂に会することができるといいですね。
- 設置校長会は、本来は静言研とは関係なく開催されていなくてはいけないものなのだと思います。が、実態はそうはなっていないのでは？(少なくとも、浜松市では発達支援学級(特別支援学級)との合同で行う研修会はあるものの、通級設置校のみの校長会は行われていません)だからこそ、通級、静言研のことをよく理解してくださっている校長先生にリードしていただけるとありがたいですね。
- 地区分けは、今まで通りがよいと思います。
- 補助金に頼るのではなく、会費だけで賄えるようにしていくのが本来なのだろうと思います。ただ、教育委員会が企画の研修の機会が十分でない中(特に言語通級は)、静言研が企画・運営する現在の在りの方がよい(会員からすれば、学びたい内容のものを学べ、教育委員会サイドからしても助かる)のだと思います。
- 要望書は、やはり県に要望していくものは残したいですね。それぞれの市町についてはそれぞれの市町で判断していくのがよいのではないかと思います。
  
- 運営委員会について・・・コロナ禍の中、改めて対面で意見交換をすることの大切さを感じました。昨年度の3月県事務局の方は大変だったとは思いますが、一度顔合わせをして話ができいたので、今年度の運営の方向性が見えていたので、迷うことなくできたのでよかったです。
- 組織について・・・ことばの教室と発達通級とは、補助金の関係・外部の研修会の機会の多

さの違いなど背景が違うところがあるので、だれにとってもいいようにまとめていくのは難しいところがあります。しかし、一度組織の中に入って、全県下のいろいろな人と会うメリットを感じてもらいたいです。運営委員になったとき、どこかで自分のためというより、みんなが研修できるようにという気持ちがありました。そんな気持ちを持つことができる、まとまっていきやすくなるかもしれません。

○校長会について・・・校長会に出席してもらった後、校長先生の理解が深まることが多いので、校長会は続けてもらえるとありがたいです。特に、寺谷校長先生がいてくださるのは、通級指導教室を理解してもらえるために、とても大きな力だと思います。

○要望書について・・・県への要望書については、続けていってほしいです。実際、環境面での問題が起っています。政令指定都市については、市の事情もあると思うので、それぞれに任せてもよいと思います。

○補助金について・・・補助金によって研修会ができ、教材が潤っています。補助金がなくなった場合、ことばの教室の担当者も静言研を抜けていく可能性があるので心配です。県に切られることのないよう、今後をお願いをしたいと思います。

○地区分け・・・現状のままがいいです。今の方が移動距離からいっても参加しやすいです。湖西市の岡崎小などは、とても遠い移動距離になってしまいます。

### 3 その他

○静言研よろず相談窓口を作ろう。ホームページでもいいし、新設でもいいのだが、言語指導に関するよろず相談窓口を作ってみたらどうだろう。回答者は、会員のみ。質問者は、記名性で、所属も明確にして、ただし、児童名が特定されないことがないようにして相談をしていくような形式で。ホームページ上でそうしたことができそうかどうか、検討してほしい。

○現会員の様子から、残念ながら、言語研修に対する姿勢・意欲・熱意の低下を感じることもある。自らを高めていくための研修組織であることを今一度自覚すべきだと思う。

○ことばの教室の研修の場合、市や県でほとんど実施してもらえていません。発達通級に比べて研修の場が極端に少ないのが心配です。研修が少ないと担当者も指導をしていくときに自信がなくなってしまう、対象の子たちを受け入れられなくなってしまうこともあります。

○今まで、静言研を引っ張ってきた先生たちも退職をしていくので、研修が自分たちにとって必要だと思わないと運営ができない状態が出てきます。静言研の研修をどれだけ大切に思っているか一人一人の考え方がこれからの静言研の方向を決めていくと思います。

○幼児の先生たちのための研修会がもっとできていくとよいと思います。たとえば、教育相談・遊び・教材・幼児期の指導・意見交換など。地区講習会は、研修したくても経済的な待遇の問題で、東京など研修に行きにくい幼児の先生たちが近くで研修しやすいようにという意図もあって始まりました。上手に活用できるとよいです。